

## 膀胱原発印環細胞癌の1例

弘前大学医学部泌尿器科学教室 (主任: 鈴木唯司教授)

石村 大史, 工藤 茂将, 米山 高弘  
梶原 哲, 古家 琢也, 鈴木 唯司SIGNET RING CELL CARCINOMA OF THE  
URINARY BLADDER: A CASE REPORTHirofumi ISHIMURA, Shigemasa KUDOH, Takahiro YONEYAMA,  
Satoshi KAJIHARA, Takuya KOIE and Tadashi SUZUKI  
From the Department of Urology, Hirosaki University

A 69-year-old man was admitted complaining of macroscopic hematuria. Cystoscopic examination revealed a non-papillary tumor at the anterior wall of the urinary bladder. A pelvic computed tomographic (CT) scan showed marked thickening of the anterior bladder wall. Radical cystectomy and bilateral ureterocutaneostomy were performed. Histopathological examination revealed signet ring cell carcinoma of the bladder, stage pT3bN1M0. This tumor is rare, and has a poor prognosis. Our patient has been well without any evidence of disease 6 months after surgery.

To the best of our knowledge, there are 44 reported cases, and our case is the 45th in Japan. (Acta Urol. Jpn. 50 : 87-89, 2004)

**Key words:** Bladder carcinoma, Signet ring cell carcinoma

## 緒 言

膀胱悪性腫瘍において腺癌はわずか1~2%にすぎない<sup>1)</sup>といわれているが, その中でも印環細胞癌は特に発生頻度が低く, また予後不良とされている. 今回われわれは, 膀胱原発と考えられた印環細胞癌の1例を経験したので, 若干の文献の考察を加え報告する.

## 症 例

患者: 69歳, 男性

主訴: 肉眼的血尿

既往歴, 家族歴: 特記事項なし

現病歴: 2002年7月, 無症候性肉眼的血尿が出現するも自然軽快したため放置. 同年8月になり再度間欠的に肉眼的血尿出現, 同年10月2日当科外来受診となった.

初診時現象: 胸腹部理学所見, 直腸診とも異常は認めなかった.

検査成績: 尿沈渣で赤血球, 無数/HPF. 自然尿細胞診は class V であった. 血液一般検査では貧血なく, 血液性化学検査でも特に異常値は認められなかった. 各種腫瘍マーカーに関しては, CA19-9 が 102 U/ml (正常値 <37 U/ml) と高値を示していたが, その他は異常を認めなかった.

膀胱鏡所見: 膀胱前壁に内腔へ突出する非乳頭状腫瘍を認め, 周囲の粘膜は広範にわたり軽度の出血, び

らんを伴い, ビロード状を呈していた. 同部位の biopsy では, 広い細胞質を有する異型細胞が充実増生しており, 病理組織学的に TCC, G3 が疑われた.

画像所見: 骨盤部 CT では膀胱前壁に, 一部造影効果を伴う境界不整な腫瘍を認め, 壁外への腫瘍の進展も疑われた. 骨盤内リンパ節腫大は認めなかった (Fig. 1).

臨床経過: 浸潤性膀胱癌の診断にて, 同年12月24日膀胱全摘術, 両側尿管皮膚瘻増設術を施行した. 術中所見では, 肉眼的に膀胱前面から左側面への腫瘍の壁外進展を認め, 膀胱は可動性がなく, Retzius 腔の展開は全く不可能であった. 開腹し, 一部腹膜ごと剝離

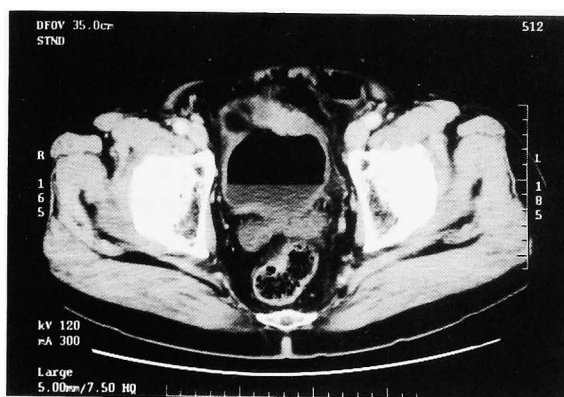


Fig. 1. Pelvic CT scan shows marked thickening of the anterior bladder wall.

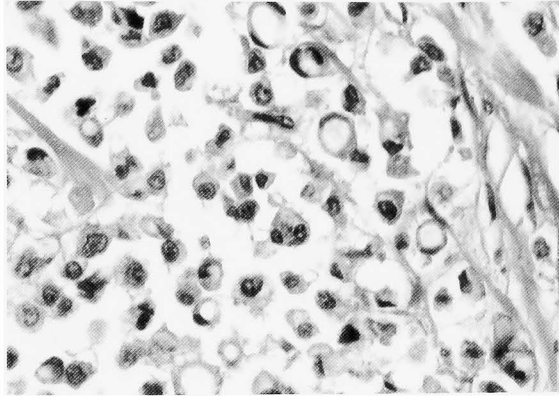


Fig. 2. Pathological findings: Signet ring cells characterized by eccentric flattened nucleus and foamy cytoplasm are numerous. HE  $\times$ 400.

することでかろうじて展開することができた。手術時間は4時間5分、総出血量は800 mlであった。

摘出標本：腫瘍は白色、弾性硬で前壁から左右壁にかけて筋層に沿って浸潤していたが、粘膜面は軽度出血、びらんを認めるのみであった。

病理組織学的所見：主病変は前壁、左側壁にあり、粘膜から筋層を越えて周囲脂肪織まで印環型の腫瘍細胞がびまん性に増殖していた (Fig. 2)。左閉鎖リンパ節にも転移を認め pT3b, N1, M0 と診断された。

以上の所見に加え、術前の消化管スクリーニング、胸腹部 CT で異常を認めなかったことから、膀胱原発印環細胞癌と診断した。

術後補助療法として有効性は報告されていないが M-VEC (メソトレキセート計 150 mg, ビンブラスチン計 15 mg, 塩酸エビルピシン計 100 mg, シスプラチン計 110 mg) による化学療法を2クール施行。経過良好にて2003年2月23日退院。現在外来経過観察中である。

## 考 察

印環細胞癌は腺癌の特異型であり、低分化腺癌に属する。多くは消化器や乳腺に発生するが、膀胱においても全膀胱腫瘍の0.13~0.56%に生じると報告されている<sup>2)</sup>。その発生機序としては、諸説存在するが、Braun ら<sup>3)</sup>の述べている移行上皮が潜在的に有する多分化能に由来するとの説が有力と考えられている。

本邦では當山ら<sup>4)</sup>が41例を集計しており、今回われわれが検索しえた3例<sup>5-7)</sup>、さらに自験例を加えた45例について検討すると発症年齢は39~88歳、平均年齢61.2歳。男女比は約3:1で移行上皮癌同様男性に多く発生している。初発症状は肉眼的血尿が約70%と圧倒的に多く、病理診断時の腫瘍深達度は pT1 6例, pT2 2例, pT3 22例, pT4 12例、不明あるいは記載なし3例と、大部分の症例が浸潤癌であった。膀胱印

環細胞癌は、いわゆるスキルス胃癌と同様に上皮下をびまん性浸潤性に発育するため膀胱粘膜の所見に乏しく、初発症状として肉眼的血尿の出現した段階で、すでに advanced stage となっていることが多いことを裏づけているものと考えられる。

膀胱に印環細胞癌を認めた場合、膀胱原発腺癌、尿管由来腺癌、転移性腺癌との鑑別が必要となる。自験例においては、各種画像検査、内視鏡的検索の結果、他臓器に原発巣と考えられうる病変は認めなかった。Johnson ら<sup>8)</sup>の尿管由来腺癌の診断基準によれば、①腫瘍が膀胱前壁または頂部に存在すること、②腫瘍と正常被覆粘膜上皮との境界が明瞭であること、③膀胱へ浸潤した他の原発腺癌がないこと、以上3項目すべての条件を満たすことが必要とされるが、自験例では腫瘍の存在部位は前壁であったものの、周囲粘膜との境界は不明瞭であり、加えて術中所見でも尿管遺残組織を確認できず、膀胱原発腺癌と診断した。

治療の多くは膀胱全摘術が選択されているが、表在性腫瘍に対しては通常移行上皮癌同様に経尿道的腫瘍切除が施行されている症例<sup>9)</sup>もある。一般に術前、術後の化学療法、放射線療法に関する有効性には一定の見解はえられていないが、集学的治療にもかかわらずその予後は、30%以上の症例 (45例中15例) で1年以内に、50%以上 (45例中25例) で3年以内に死亡しており極めて不良と考えられる。

自験例は現在のところ画像上異常所見なく、経過良好であるが、今後も厳重な経過観察を要するものと考えている。

## 結 語

膀胱原発と考えられた印環細胞癌の1例を経験したので若干の文献的考察を加え報告した。

## 文 献

- 1) Thomas DG, Ward AM, William JL, et al.: A study of 52 cases adenocarcinoma of the bladder. *Br J Urol* **43**: 4-15, 1971
- 2) Blute ML, Engen DE, Travic WD, et al.: Primary signet ring cell adenocarcinoma of the bladder. *J Urol* **141**: 17-21, 1989
- 3) Braum EV, Ali M, Fayemi O, et al.: Primary signet ring cell carcinoma of the urinary bladder: review of the literature and report of a case. *Cancer* **47**: 1430-1435, 1981
- 4) 當山裕, 外間実裕, 秦野直, ほか: 膀胱原発の印環細胞癌の1例. *泌尿紀要* **47**: 853-855, 2001
- 5) 山口 旭, 平山暁秀, 三馬省二: 特異な画像所見を呈した膀胱原発浸潤性印環細胞癌. *臨泌* **55**: 1233-1235, 2001
- 6) 仙崎秀人, 上田 恵, 佐藤陸哉, ほか: 頸部リン

- パ節転移にて発症し剖検にて診断しえた膀胱原発印環細胞癌の1例. 癌の臨 **48**: 525-529, 2002
- 7) 餌取文昌, 後藤美香, 榊間利政, ほか: 膀胱原発印環細胞癌の1例. 岐阜市民病年報 **22**: 50-53, 2002
- 8) Johnson DE, Hodge GB, Abdl-Karim FW, et al.: Urachal carcinoma. *Urology* **26**: 218-221, 1985
- 9) 松崎 敦, 小林 裕, 鈴木一実, ほか: 膀胱原発印環細胞癌の1例—pT1 症例—. 泌尿紀要 **46**: 127-130, 2000
- (Received on July 2, 2003)  
(Accepted on October 12, 2003)